2022年3月　毎月1日発行　第163号
発行者　光栄プロテック　中川

3月に向けて

代表取締役　三田雅憲

2月も終わり、ようやく早春の季節となろうとしております。
　3月は、会社として今期最後の月となります。終わり良ければすべて良しのごとく、今期から来期はたまた来々期、良い仕事が集まってくると考えております。社員諸君も1人1人の技量UPとマルチ化、見極め力等の向上を目指して頑張って頂きたく思います。
　さて、今月も指導者について故 野村監督に学びたいと思います。

現在、私が率いる楽天ゴールデンイーグルスには、数球団を渡り歩いてきたり、複数の監督に仕えてきた選手やコーチが何人かいる。彼らによると「ミーティングを行う監督がいなくなった」そうである。彼らによると就任早々、もしくはキャンプが始まって5分か10分「頑張ろう」と一言訓示をたれてそれで終わりだと。それを聞いて私は愕然とした。そういう監督（指導者）たちは、いったい何のために今の地位についたのか考えてみたことはあるのだろうか？ただ栄誉欲だけで引き受け、自己満足でもしているのか？
監督（指導者）の役割とは何か、そして義務とは何であるかを深く考えれば、そんな無責任な行動はとれないはずだ。人生を野球だけでまっとうできる人間など、ほんの一握りである。残りの大半は一般的には働き盛りの年頃で現役を退き、第二の人生を歩み始めねばならない。そこからの人生の方が遥かに長いのである。プロ野球は元来が弱肉強食の競争社会であり、力のない者は容赦なく淘汰されてきた。そして、そのほとんどが「野球をとったら何もない」あるいはそう思い込んでいる男たちである。決して華やかな面だけではない。厳しい商売だ。私は野球人である前に一人の人間として、彼らが引退した後のことも踏まえて教育してやらねばならないと考え、指導してきたつもりだ。「人生」という字には様々な意味が込められている。「人として生まれる」「人として生きる」「人を生かす」「人に生かされる」それぞれの言葉を噛みしめて大切にしていかねば、本当の意味で人生を送ったことにならないのではないか？
また「人間形成は仕事を通じてなされる」と私は書いた。生きていく基本的な知識や情操は家庭や学校で育まれるものだが、仕事を持つようになって初めて私たちは人生の意味を知るようになる。言い換えれば大人になっていくのである。野球が仕事ならば野球を通じて人生を知り、人間的に成長してこそ技術的進歩も実現するのである。監督（指導者）という職業の人間は言葉を使って伝達する。言葉を持たない指導者など何者でもない。
また「各選手が必ずしも名監督ではない」と昔からよく言われる。二流上がりの監督ならば苦労も多く壁にぶつかったことも多い。目標に向かって困難を克服してきた経験が多いので「俺もできなかったから、お前もできなくて当然だ」という接し方から始まる。さらに上を目指すために観察眼が養われているので、選手の動きについて分析力が備わっており采配に対しても同様で「自分ならこうする」という理論が構築されているケースが多い。名も無きプレーヤーの中にこそ「リーダーの器」が潜んでいることを知らしめたかつての阪急ブレーブス黄金時代を築いた土田利治などは、その典型でありその功績は大きい。

と述べておられます。ここで言う監督とは工場長であり、班長であり、班長代理の立場、営業では係長であります。自己中心ではなく下の立場のことを考えて仕事を進めることが、回りまわって自分の為になることを私たちは知っているはずです。故 野村監督の言葉を心に刻んで指導者の皆さんは頑張ってもらいたいのと、下の立場は少しでも上の先輩が楽になるように自分の力を高める努力をしていってほしいものです。